岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第33号（2012．3）

一語文としての呼びかけ語

李　　紫娟

0．はじめに

呼びかけ語は、インド・ヨーロッパ語などでは、古くは名詞の格変化の中で呼格（vocative）という独立した取扱いを受けていた。たとえばラテン語では　dominus（主人）という名詞の呼格はdomine（主人よ）である。これに対して、最も早い段階で日本語の呼格を取り扱った研究としては山田（1908･1936）があげられる。そこでは、呼格は「〈述体〉の句」から区別された「〈喚体〉の句」の中心をなす名詞である。そして、山田（1908・1936）の〈喚体〉概念を継承的に検討する研究として、尾上（1998）があげられる。そこでは、そのいわゆる「〈喚体〉の句」が「なぜ感動喚体と希望喚体に分けられ、かつなぜその二つだけなのかという喚体理解の根本問題」などを日本語の一語文の全体を対象にして詳しく検討しているが、呼びかけ語としての一語文は、明確には位置づけられていないと思われる。

本稿では、

（1）仲原：｛立花に向かって走りながら｝　立花さん。
　　立花：｛予想どおりだが、びっくりするふりをして、立ち上がる｝　仲原さん。（泣）

のような呼びかけ語的な一語文を対象にして、それが具体的な場面のなかでどのような用法をもって、そして、対人的な関係のなかでどのような意味を実現しているかといった用法と機能を探ることによって、従来の研究の中に位置づけることを試みる。

1．先行研究および本稿における呼びかけ語

この節では、呼びかけ語と一語文にかかわるいくつかの先行研究を紹介し、本稿における呼びかけ語の規定を述べる。

1.1　山田孝雄の〈喚体句〉と尾上圭介によるその継承

山田（1908･1936）は最も早い段階で日本語の呼格を取り扱った研究である。そこで、山田（1908：806）は、日本語の呼格について「呼格とは文中にありて他の語と何等の形式的関係なしに立てるものをいふ。これを呼格と称するはその対象又は対者を呼びかけて指定するによりてなり。」、そして、山田（1936：671）は、「吾人がある思想を表示せむとする時に了解作用に訴えるの方法によらずして端的にその思想の中核たる観念を提示するに基づくものなりとす」と述べている。

香をだにぬすめ、春の山風。(1908：806)
苔の袂よ、かわきだにせよ。(1908：806)

そして、山田（1936）は、「事態の在り方が言語場面だけで決まるか（a, b)」、「場面に依存しなければ決まらないか（c）の差」によって〈句〉を〈完備句〉と〈不完備句〉に分けている。

(a)「(まあ）きれいな桜！」……〈完備句〉
(b)「桜がきれい！」……〈完備句〉
(c)「きれい！」……〈不完備句〉

そして、〈完備句〉(a, b）には〈喚体〉の句（a）と〈述体〉の句（b）に分け、〈喚体〉の句を「常に一の体言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心点として構成させられるものなり。(山田1936:936)」と規定し、また、「これはその直観的一元性の発表にして、感情的の発表形式をとる（山田1936：936)」と述べている。このように規定された〈喚体〉の句には「うるはしき花かな」(山田1936:944）のような〔連体格―中心骨子たる体言〕という形式を必要条件とした〈感動喚体〉と「老いず死なず薬もが」(山田1936：949）のような〔中心たる体言―希望終助詞「が」〕という形式を必要条件とした〈希望喚体〉とが含まれる。

山田氏の〈喚体〉の規定の整理として、大木（2006：41）を引用すると以下のようである。

(A）形式面の規定: ①一元的構造（呼格名詞を中心とした1項的な文であるということ）
②連体格（希望喚体は任意）
③終助詞（感動喚体はなくても成立するものがある）
(B）意味面の規定：「喚」的意味。すなわち感動もしくは希望的意味。　大木（2006：41）

山田（1908・1936）の〈喚体〉概念を継承的に検討する研究として尾上（1998）があげられる。尾上（1998：219）は、山田（1908・1936）の〈喚体句〉の性質について、次のように修正したうえで把握している。

『喚体句』の性質
（1）その表現は、その時、その場の心的経験・心的行為（感嘆・希求）に対応する（(現場性)）。
（2）表現される心的経験・心的行為はものやことの中に対象化されえない。
（3）言葉になるのは遭遇対象、希求対象のみで、心的経験・心的行為の面は言葉にならない。
尾上（1998：219)

そして、尾上（1998：220）は、「ある形の文が、その形自身の内には含んでいないある意味を結果として伝えてしまうという事実は、実は感動喚体や希望喚体の場合にとどまらない。現場的な発話状況や文脈の在り方によって、その文形態自身の持つ以上の意味を結果的に表現してしまうということは、一般的にありうることである」と主張している。そして、「形としては単語一語であるものが、単なる語的概念の表示たることを超えて、文としての内容を表現するに至ったものが一語文」と考え、その上「現場や文脈などの発話状況によって、ある文形態がそれ自身以上の意味を表現してしまう可能性のすべてを通観するには、いわゆる一語文の用法を検討することが有益」であると考えている。そこでは、一語文を大きく「言語場依存的な一語文」、と「独立的一語文」（《メモ・列記・表題》）に分けている。そして、さらに「言語場依存的な一語文」を、「現場依存一語文」と「文脈依存一語文」に分けた。

尾上（1998）は、「現場依存一語文」を「存在一語文」と「内容承認一語文」に分けている。さらに「存在一語文」には、A〈存在承認〉一語文、とB〈存在希求〉一語文が含まれる。

- 存在一語文
  - A存在承認
    - 喚体的―感動喚体的一語文――A１《発見・驚嘆》
    - 伝達的―存在告知一語文――A２《存在告知》
  - B存在希求
    - 喚体的―希望喚体的一語文――B１《希求》
    - 伝達的―存在要請一語文――B２《要求》

例：A１《発見・驚嘆》…「とら」との遭遇における驚きをただ自らの驚きの叫びとして発話する

A２《存在告知》……「とら」の存在を他者に伝えようとする姿勢を帯びる

B１《希求》……砂漠で必死に「水」を求めるとき、「水！」と叫ぶことで、希求感情そのものを結果的に表現してしまう

B２《要求》……自らの希求感情というより、他者への伝達的な存在要請

そして、「内容承認一語文」は、ある意味では述体的なものとも考えられる。

- 内容承認一語文
  - C現場遭遇承認
    - 確言系
      - 受理的――C１《受理》
      - 確認的――C２《確認・詠嘆》
    - 疑問系
      - 受理的――C３《受理的疑問》
      - 確認的――C４《問い返し》
  - D承認内容伝達
    - 内容告知一語文――D１《内容告知》
    - 認識表明一語文
      - D２《受理》
      - D３《確認・詠嘆》

例：C1《受理》……竹やぶの中の動くものに目を凝らして、それがとらであることを認識したとき、おもわず「とら（だ）」とつぶやき、あるいは叫ぶのような場合

C2《確認・詠嘆》…疑いや吟味を経た上で「確かにとらだ」「間違いなくとらだ、ああ、そうなんだ」と確認するような色合い

C3《受理的疑問》…竹やぶの中に、黄色と縞模様らしきものが見えた時の「ん？とら？」

C4《問い返し》……竹やぶの中に、黄色と縞模様らしきものが見えた時、確認的な疑問の気持ちを帯びた「とら？」

D1《内容告知》……竹やぶの中のとらを認識したとき、横に並んでともにそれを見ている同行者に教えるための発話「とら（だ）」

D2《受理》……竹やぶの中で隣を歩いていた人が「おい！」と前方を指す。その注意喚起に対して「とら」という発話で返答するような場合

D3《確認・詠嘆》……D2の延長の「私はこう思う、どうだろうか」と相手の同意を期待するような色合いの認識表明

そして、尾上（2006）[1]は、一語文について、「所詮モノ概念の名称に過ぎない名詞一語が文としての意味を表現する場合とは、その概念の指示対象の存在承認か希求であらざるを得ないのである」。（「みかん」という名詞一語を発話して有効に意味が表現される場合、特別な文脈がない限り、それは「みかん」の存在承認か希求かのいずれかになる。（尾上2006：7））

呼びかけについて、「…それ自身一つの文である呼びかけは、単なる「存在希求」から「招来欲求」、「対象とのつながりの希求（関係構成欲求）」、さらには「対象への働きかけの意志一般」を担うものへと広がるが、出発点はモノ（人を含めて）の存在希求である。」（尾上2006：8）とされ、そして、「希求・命令文の一語文では希求される対象が言葉に発せられるのであるが、希求対象とは、基本的に「存在を求められるモノ」か「求められるあり方」かのいずれか一方である。」（尾上2006：10）

「おかあさーん！」　→　希求対象物（存在するもの）
「あるく！」　→　希求運動（在り方）

尾上（2006）は、上例のような呼びかけ文を希求・命令文の希求対象物と認定している。

1.2　言語機能論の観点から

言語活動の機能としては、ビューラーによれば、表現（Ausdruck）、喚起（Apell）、および叙述（Darstellung）の三つが考えられるという。そして、ヤコブソンは、このビューラーの説に基づいて、六つの機能を立てている。つまり、ビューラーの「叙述」機能を「関説的（referential）」機能とし、ビュー

ラーの「表現」機能を「心情的（expressive）」機能とし、そしてビューラーの「喚起」機能を「動能的（conative）」機能としている。さらに、ヤコブソンはこの三つの機能に加えて、「話し手と聞き手を結びつける交話的（phatic）機能」と、「コードとしての言語形式が同じものであるかどうかを確かめるメタ言語的（metalingual）機能」と、「上述の叙述機能の技巧に関するものである」「詩的（poetic）機能」の三つを付け加えている。

ビューラーの言語の三つの機能について、詳しくいえば、以下のようである。

> 話し手が発話をするとき、その発音によって自分自身の肉体的・精神的状態を**表現**する。その表現によって、話し手は聞き手に訴えて話し手の期待する行動を引き起こす意欲を**喚起**しようとする。そして、話し手は聞き手に対して自分の思うところ（意味内容）を言語形式を使って**叙述**する。
>
> 『言語学大辞典』（p.274）

このビューラーの言語の三つの機能について、佐久間鼎は、次のように解釈している。すなわち、「表現（Ausdruck）」という機能は、内容が大体表情と同じである。このとき、単語で一つの文を構成することができ、そして、概念的な内容を持つ単語が、ある結びつき方をして発現される際に、同時に声の表情的効果がついている。次に、「喚起（Apell）」という機能は、話の相手に対する態度を表すものと見ることができる。そして、態度を示して相手の反応を待ち受けるともいえる。これの簡単な場合は、人の注意をうながす「呼びかけ」であり、「間投詞」といえるようなものである。さらに、主語のない、述語（命令形）だけの文、または述語とそれの補語・修飾語だけで文が成立する。第三の機能として、「叙述（Darstellung）」における文の組み立ては、主語の存立を必要とする。そして、この機能が言語の本然の働きだという。そして、この三つの機能もまたそれぞれ、話者に関するもの、話の相手に関するもの、話し手と聞き手以外のすべてに関するもの、つまり、それぞれ一人称、二人称、三人称にかかわる機能である。

1.3　呼びかけ語の位置

以上で本稿に深く関連する山田の〈呼格〉と〈喚体〉の概念、尾上の「日本語の一語文」の説、およびビューラーとヤコブソンによる言語機能の分類を概観した。

本稿の対象である呼びかけ語は、山田（1908・1936）の〈喚体〉の文の一種であると考えられるが、形式面でも意味面でも、呼びかけ語は、典型的な〈喚体〉の文の特徴をそなえているわけではないことがわかる。

日本語の一語文全体を対象とする研究としての尾上（1998・2006）では、まずそれを大きく「言語場依存的な一語文」、と「独立的一語文」（《メモ・列記・表題》）に分け、さらに「言語場依存的な一語文」を、「現場依存一語文」と「文脈依存一語文」に分けていた。本稿の対象である呼びかけ語に

よる一語文は、基本的に上の分類のうちの「現場依存一語文」のなかに位置していると思われる。尾上（1998）は、「現場依存一語文」を「存在一語文」と「内容承認一語文」に分け、さらに、尾上（2006）では、日本語の名詞一語文について、それが「その概念の指示対象の存在承認」か「希求」であらざるを得ないと主張している。しかし、呼びかけ語による一語文をすべてそこに位置づけることができるかどうかに関しては疑問がある。

また、言語機能論との関係では、呼びかけ語は、ビューラーのいわゆる表現「（Ausdruck）機能」にも「喚起（Apell）機能」にも対応する面があり、さらにヤコブソンのいわゆる「交話的（phatic）機能」にも関係がありそうである。この点についても検討の余地があるだろう。

2．調査方法

2.1　調査対象

呼びかけ語の観察においては、具体的な対話場面を必要とするため、研究資料としては、小説よりも、対話状況が視覚的・聴覚的に確認できるテレビドラマ・映画のほうがふさわしいと思われる。ただし、ドラマ・映画には演技性がつきまとい、実際の日常生活場面とは使用法が異なっているのではないかとの疑問も考えられる。その点では、自然談話が望ましいが、自然談話から呼びかけ語の多様なデータを採集することは非常な困難が伴い、現実的でない。多様な用法を網羅的に観察するには、ドラマ・映画のほうが圧倒的に有利である。そこで本稿では、テレビドラマを対象とし、下記の番組のビデオ画像を確認しながら該当場面のセリフをテキストに書き起こし、場面情報を付加するという方法でデータを作成した。筆者の見たところ、演技性が問題になるような例は、ほとんどなかったことも付言しておこう。

表１　調査対象

ドラマ	回数	用例数	合計
花嫁とパパ （フジテレビ2007年６月26日放送終了）	全12回内の１～８回	339	600
泣かないと決めた日 （フジテレビ2010年３月16日放送終了）	全８回内の１～８回	261	

2.2　対象とした用例

次に、本稿が対象とする呼びかけ語の範囲を説明する。

日本語の呼びかけ語は、構文論的な性質から、大きく「文」と「文の成分」という二つの違ったレベルのものに分けられる。文としての呼びかけ語は、すなわち一語文に属するものであり、文の成分としての呼びかけ語、つまり文の一部分にすぎない呼びかけ語は、直接的に文内容とかかわりのない独立語として働くものである。

（1）仲原：｛立花に向かって走りながら｝　立花さん。……［独立語文］

立花：｛予想どおりだが、びっくりするふりをして、立ち上がる｝　仲原さん。（泣）

（2）藤田：｛立ち上がって、大声で｝　西島君、もっと食い込みなさいよ！（泣）……［独立語］

この区別は、呼びかけ語の機能を考える上ではぜひ必要なものであるが、周知のように、文の切れ目の認定は大変困難であり、曖昧な場合も少なくない。本稿では、画像と音声の検討を通じて、一語文であることがある程度明確なものに絞ってある。

また、日本語の呼びかけ語は、ⅰ）固有名詞（姓名によるもの）；ⅱ）代名詞；ⅲ）親族名称；ⅳ）職名、地位名、称号；ⅴ）感動詞などいろいろな表現形式がある。

（3）役員A：｛席を立ち上がって｝　梅沢部長！　どういうことだ？（泣）……［固有名詞］

（4）角田：｛ドアのところまで歩いた西島に向かって｝　あの。

西島：｛ゆっくりと振り返って、角田を見つめる｝（泣）……［感動詞］

そして、その構造的なタイプからいえば、大きく「単独構造」と「複合構造」が含まれる。「単独構造」とは、一つの品詞類だけで呼びかけ語をなす場合であり、これには一回だけ呼びかける場合、と二回以上繰り返して呼びかける場合がある。「複合構造」とは、異なった品詞類（ここでは「名詞」と「感動詞」）の組み合わせで呼びかけ語をなす場合である。

（5）奏　乃：｛宇崎の後ろで追いかけながら｝　宇崎さん、宇崎さん、宇崎さーん

宇　崎：｛立ち止って、奏乃を振り返る｝（花）……［単独構造・二回繰り返す］

（6）槙　原：｛手を叩きながら｝　ほら、みんな、早く、急いで！　｛舞を指さしながら｝　岩倉さん、デスクの上、片付けて。金山さん、メーク、終了！（花）……

……［複合構造・感動詞＋人称名詞］

そして本稿は、上述の構文論的な性質から分類した文レベルの呼びかけ語、つまり独立語文（本稿は、このような文を「呼びかけ語の一語文」と称する）を扱う。

表2　呼びかけ語による一語文

構造	パターン	述語文と共起	非述語文と共起	一語文	計
単独	固有名詞	226	34	114	374
	親族名詞	63	6	21	90
	地位名称	13	4	6	23
	人称名詞	23	2	0	25
	感動詞Ⅰ	28	／	2	30
	感動詞Ⅱ	8	1	3	12
複合	感Ⅰ＋固	22	1	7	30
	感Ⅰ＋親	5	／	2	7
	感Ⅰ＋地	4	／	2	6
	感Ⅰ＋人	1	／	／	1
	感Ⅰ＋感Ⅱ	1	／	／	1
	親＋感Ⅰ＋親	1	／	／	1
計		395	48	157	600

3．用法の記述

呼びかけ一語文を、ここでは、その呼びかけの機能によって大きく「働きかけ的な呼びかけ一語文」と「受け手的な呼びかけ一語文」に分けて記述する。前者は、呼びかけることを通して、聞き手に何かをさせようと働きかける意図をもつものであり、後者は、発話現場で生じた事態への反応として出てくるものである。一語文の呼びかけ語は、基本的には、この二つのいずれかになると思われる。

3.1　働きかけ的な呼びかけ一語文

働きかけ的な呼びかけ一語文は、「話し手は聞き手に訴えて話し手の期待する行動を引き起こす意欲を喚起しようとする」点において、従来言われている言語の喚起（Apell）機能を最も強く有していると考えられる。以下では、「聞き手のどのような行動を期待しているか」ということが先行文脈（言語的・非言語的）に現れているか否かの検討をとおして、その働きかけのメカニズムを考える。

3.1.1　希求内容が先行文脈にある場合

働きかけ的な呼びかけ一語文の一つのパターンとして自分の求めているコトガラが先行文脈に明示され、相手がそれに対して自覚していない、あるいはすぐに実行しようとしない時に、その相手の名前を呼ぶことによって、その相手に強引に勧めたり、促したりして実行を求める場合がある。

［促す］

（7）美奈子：｛渡された紅白饅頭を手にとって見る｝　紅白饅頭？
　　賢太郎：うん。
　　美奈子：｛かごにある紅白饅頭を見ながら｝　どうするの？こんなに買い込んで
　　賢太郎：｛愛子の顔に向う｝　愛子　｛愛子に紅白饅頭を配らせようとする｝
　　愛　子：｛嫌な顔で｝　絶対に配らないから（花）

（8）真　弓：そんなにウザイなら、誰かと、再婚させちゃえば？
　　愛　子：｛美奈子に向って｝　美奈子さん！
　　美奈子：　　[2]無理～（花）

（9）賢太郎：（愛子に向かって）シュンイチ　ナルミの携帯番号、教えろ
　　愛　子：絶対、嫌（と拒否する）
　　賢太郎：同僚の三浦君
　　三　浦：あっ、いや、あの　｛頭を別の方向へ向く｝（花）

（10）愛　子：では、室長、乾杯よろしくお願いします。
　　鳴　海：｛ゆっくりと立って、宇崎に言う｝　宇崎さん、やって。
　　愛　子：えっ!?　｛手を振りながら｝　あっ!?い…いや、わたし、そんな…

三　浦：｛励ましている顔で｝　宇崎さん

愛　子：｛三浦の顔を見て、二歩前進んで｝　では、これからも、末永く、末永く、よろしくお願いします　｛ワインを挙げて｝　乾杯！（花）

以上の例はいずれも希求内容であるコトガラは先行文脈にあり、働きかけのみが純粋に呼びかけに担わせている。そして、呼ばれた方はいずれもその希求内容の実行に対して拒否している（「絶対配らないから」、「無理」、「いや」）が、その拒否する態度も希求内容が先行文脈に明示してあることの証拠と考えられる。

［注意喚起］

（11）初　音：｛よそを見ながらコーヒーを運んでいる宇崎に向かって注意する｝　あっ、宇崎さん

宇　崎：｛もう遅いから、あわてて目の前にいる安奈の洋服にコーヒーをこぼす｝　あっ（花）

（12）角　田：｛ずっと外で西島を待っていたが、来なくて、一人で店に入る｝　失礼します。

中　村：｛後ろに座っている従業員たちに振り返って｝　おい。

みんな：｛席を立って、こっちへ向かう｝

中　村：｛みんなたった後、席を立つ。角田にいう｝　お待ちしておりました。

角　田：｛おじぎをする｝

中　村：｛自分の向かいの椅子を指しながら｝　どうぞ。　｛自分も座る｝

角　田：失礼します。　｛椅子に座る｝

（7）～（10）のような言語的先行文脈に対して、（11）、（12）は非言語的先行文脈の場合である。（11）の非言語的先行文脈は、コーヒーをもっているのに、ちゃんと前を見て歩かないという危ない状況にあり、危ない事態の発生を防止しようとする意図をもって、話し手がその中心人物を呼びかけている。（12）の非言語的文脈は、中村の店の従業員が全員そろって角田を待っている状況であり、一番前で入口に面している中村が一番早く角田の現れを察し、そのメッセージをみんなに伝えるため、みんなの注意を呼びかけている。このような希求内容が先行文脈にある場合、その希求対象は話し手が望んでいるコトガラである。

［叱り］

（13）［宇崎愛子が就職したばかりのある日、仕事帰りに高い服などを買いこんで、家に帰る］

賢太郎：それ全部、店に返してこい。　｛荷物をとろうとする｝

愛　子：｛逃げる｝　嫌よ！　自分のお金で、何、買おうが、わたしの勝手じゃない。

賢太郎：愛子！

愛　子：もう親のスネ、かじってるわけじゃないんだから。

賢太郎：嫁入り前の娘は親の言うことを聞くもんだ！

［制止］

(14) 賢太郎：お前はまだ…

愛　子：　　もう子供じゃない！私はお父さんと対等に話がしたいの！なのに、いつも頭ごなしに、ダメだダメだって

賢太郎：俺は父親として…

愛　子：お母さんがいてくれたら、きっと違ったかもしれないね。お母さんなら、きっと私の味方になってくれてた。お母さんがいてくれたら、よかったのに。

三　浦：宇崎さん

賢太郎：｛泣く｝

(15) ［小滝は愛子の会社の取り引き先になる可能性があったが、愛子のミスでダメになった。父の賢太郎は愛子が謝っているのを見て、事情を少し聞いて、小滝をしかる］

賢太郎：｛小滝に向かって歩きながら言う｝　子供が服を汚して、何が悪い？

小　滝：何なんだ？きみは

賢太郎：あんたもあんただ。子供が汚したぐらいで目くじら立てて。

小　滝：何？

賢太郎：どんなに高い服だろうが、子供服なんて、作業着みたいなもんでしょう。

小　滝：偉そうに！

愛　子：｛びくびくしながら｝　お父さん…

賢太郎：　　ちょっと貸せ。　｛愛子の持ってるボールをとる｝　あんた、子供とキャッチボールやったことありますか？

小　滝：そんなことする必要はない。

賢太郎：……服が汚れるぐらい、いいじゃないですか？子供が笑ってくれればそれだけで幸せじゃないですか。親って、そういうもんでしょう!?　｛周りの空気を呼んで｝　あっ…、悪い。ちょっと、熱くなりすぎました。

(13) ～ (15) は先行文脈があるという点では（7）～ (12) と同じである。だが、働きかけのし方が異なる。それは、（7）～ (12) の「させる」という働きかけのし方に対して、(13) ～ (15) の場合は、いずれも話し手は先行文脈から、その相手がすべきではないことをしていることを受け、それを「やめさせる」ということを求め、相手に呼びかけている場合である。(13) の［叱り］は相手から受けた事柄に対して、相手への呼びかけによって、それが「悪い！」というメッセージと、「直せ！」というメッセージを伝えている。(14) (15) の［制止］は、話し手は相手がイマ・ココですべきではない発言を受け、すぐ「中止すべき」というメッセージを呼びかけによって伝えている。

よって、ここの［叱り］、［制止］は受け手的な面と働きかけの機能が共存していると考えられる。そして、後述の［非難］は、相手にかかわる事柄に対する評価だけである点で、これらと異なる。

3.1.2　希求内容が先行文脈にない場合

次に取り上げるのは、希求内容を明示・暗示する先行文脈はないものの、何らかの行為を要求しているものである。

［呼び戻し］

(16) 賢太郎：｛愛子を睨み返す｝　そんなに、いいのか？チャラチャラした世界が。
　愛　子：キラキラした世界って、いって。
　賢太郎：｛ごまかしに笑う｝　へへ…　｛タオルを渡しながら｝　はい。
　愛　子：｛渡されたタオルを無視して籠の中から新しいタオルを取って下へ向う｝
　賢太郎：｛しようがなく、ため息をつく｝　愛子！（花）

(17) 努：｛小滝と出ていくところ、突然手を離して、後ろにいる愛子に向かって走りだす｝
　小滝：｛あわてて努を見る｝　努！
　努：｛お父さんを無視して、愛子の前まで走る｝　お姉ちゃん、ありがとう！（花）

［呼び出し］

(18) 三　浦：｛三浦と愛子は会議室で｝　それ、ゴーマンじゃなくて、傲慢だと思う…
　槙　原：　｛会議室の外から｝　三浦君、宇崎さん
　ふたり：はい。　｛外へ出る｝（花）

(19) 賢太郎：｛階段を上がってくる｝　何やってる？早く来い
　三　浦：あっ、すみません。
　賢太郎：言っとくが、君と手を組んだわけじゃないからな。これはあくまでも愛子のために…
　安　奈：｛一階で三浦を呼ぶ｝　三浦君！
　三　浦：あっ、はい！　｛急いで安奈の居場所へ行く｝（花）

上の（16）～（19）の［呼び戻し］、［呼び出し］は、先行文脈に呼ばれている相手に求めるコトガラがない。そして、話し手と聞き手の間にいくらか距離がある場合、呼びかけは「こちらに来い」という内容の要求になるようである。

［意識の喚起］

次の例は、意識を失っている相手を心配して、呼びかける場合である。そして、自分の声に反応して、答えさせよう、反応させようとしている点で、働きかけと認めうる。

(20) 三　浦：｛賢太郎に向かって｝　お願い…します…　｛意識を失って倒れる｝

愛　子：三浦さん!?　三浦さん！三浦さん！（花）

（20）は、希求内容が先行文脈にない点は（16）～（19）と同じであるが、ことばにしている呼びかけ語は自分の声に反応する主体である。

3.2　受け手的な呼びかけ一語文

3.1で述べた呼びかけ性の強い呼びかけ一語文に対して、ここでは性質の異なった、つまり呼びかけ性のうすい呼びかけ一語文について述べる。受け手的な呼びかけ一語文とは、話し手が相手、あるいは相手にかかわる何らかの事柄から刺激を受け、相手への呼びかけによって自分の反応の仕方を相手にぶつける場合である。そして、ここでの分類基準は、何を認識したことが呼びかけという反応の起因となったかという点である。これには大きく、認識の対象が聞き手の存在・出現である場合、聞き手の行為・状態である場合、第三者の行為・状態である場合があると思われる。そして、この場合、もっぱら自分の反応や、感情などを表現している点で、ビューラーのいわゆる「話し手が発話をするとき、その発音によって自分自身の肉体的・精神的状態を表現する」という言語の表出（Ausdruck）機能[3]を実現しているといえる。

3.2.1　聞き手の存在・出現に対する認識を起因とする場合

受け手的な呼びかけ一語文には、相手の存在に気付くことで、その当事者を呼びかける場合がある。そしてこれは、イマ・ココで認識したと同時にその結果として、その認識の内容である相手をことばにする文のタイプである。これもまた受ける対象はもっとも単純で、受ける対象に対する反応ももっとも原始的であり、典型的な呼びかけ語ではないという見方も成り立つかもしれない。だが、相手を指す語を相手に向けて投げかけることから、弱いながらも呼びかけ性が生じていることは認めなければならないだろう。

［相手の存在への気づき］

（21）仲原：｛ちょっと離れたところで鈴木の声が聞こえたので、そちらを見る｝　鈴木。

鈴木：｛仲原に呼ばれ、声のある方向を見る｝　お～、どうした？　｛仲原の方へ向かって歩く｝

仲原：朝から案内の下見なんだよ。来週、フランスのグランエール社の重役が来日するからさ。

鈴木：あ～、出た、あれだ。

仲原：｛鈴木の隣に立っている角田に気づく｝　あれっ？きゅうちゃん。

角田：お疲れ様です。｛笑いながら、会釈する｝（泣）

［相手の現れに対する驚き］

(22) [11時過ぎになっても、愛子がまだ帰ってこないから、賢太郎と三浦が心配している。やっとドアホンが鳴ったので、ドアを開けたら、鳴海が現れた]

賢太郎：シュンイチ　ナルミ

三　浦：室長！

鳴　海：｛酔っている愛子をおんぶして家に入る｝

賢太郎：｛愛子を見て、びっくりする｝　あっ…愛子！

三　浦：宇崎さん！（花）

(21) の相手の存在への気づきと (22) の相手の現れに対する驚きは、認識のレベルは異なるように思われるが、ことばに発するものが認識の対象と一致（つまり同じ相手の存在自体である）している点で、ここでは、同じタイプの呼びかけ一語文にみなす。そして、相手を認識したと同時に、その遭遇・認識した対象をそのままことばにする点からみれば、尾上のいわゆる「存在承認」一語文の性質に近いタイプの文と考えられる。また、このような呼びかけは相手と遭遇したときの感嘆を表現しているため、そこでビューラーのいわゆる言語の表出（Ausdruck）機能を実現していると考えられる。

3.2.2　聞き手の行為・状態に対する認識を起因とする場合

受け手的な呼びかけ一語文には、先行文脈に自分あるいは相手にかかわる何らかの事柄があり、そして、イマ・ココでの話し手の認識や評価的な感情などを、相手への呼びかけによってその相手にぶつけるタイプの文がある。また、これには話し手の意外的な気持ちだけを表現するタイプの文と、事柄に対する感情的評価の意味まで相手に表現するタイプの文との二つのタイプがある。そして、この場合の話し手の反応は、聞き手の存在・出現に対する認識を起因とする場合に発する呼びかけ一語文よりレベルが高いため、呼びかけ性も同時に一層強く感じられる。さらに、先行文脈から受けた事柄に対する反応を表現している点で、1.2で紹介したビューラーのいわゆる表出（Ausdruck）という機能[4]を実現していると考えられる。

Ⅰ　事柄に対する驚き

これは相手への呼びかけによって、イマ、ココでその相手から受けた自分の予想外の発言や、行動、態度、状態などに対する自分の態度を表す場合の文のタイプである。

[相手の発言に対する驚き]

(23) 房　江：はっきり申し上げます。お嬢さんとは結婚させられません。

賢太郎：うちも、娘を嫁にやるつもりはありません。

三　浦：｛びっくりする｝　宇崎さんのお父さん

房　江：なら、どうしていらしたんですか？（花）

［相手の行動に対する驚き］

(24) 賢太郎：頑張るな！頑張るな！　まっ、とにかく今日は帰りたまえ。十分食ったろ、なっ？

三　浦：いえ、ちょっとまだ…

愛　子：お父さん！ちょっと…

三　浦：まだ、残ってる

賢太郎：｛座ってご飯を食べる｝　えーと…

三　浦：ご馳走さまでした…　｛帰る準備をする｝

愛　子：三浦さん

三　浦：｛帰ろうとする｝　それじゃ失礼します。　｛最後、さびしそうに愛子を見る｝（花）

［相手の状態に対する驚き］

(25) 美奈子：｛賢太郎が愛子のことでショックを受けた翌日の朝、ジョキングしている振りをして、健太郎の様子をみる｝　ひっ!?

賢太郎：｛美奈子を見て、さわやかな笑顔で｝　おっ、美奈子、おはよう。

美奈子：｛びっくり｝　け…賢ちゃん

賢太郎：｛空を見ながら｝　さわやかな朝だな、気分、爽快、爽快！ハハハ…（花）

(23)～(25)の例は、3.2.1で述べたタイプの呼びかけ一語文と比べ、呼びかけの起因が聞き手の存在・出現に対する認識か、聞き手の行為・状態に対する認識かという点で、異なったタイプの呼びかけ一語文と見られるが、認識後の反応の表出であり、受け手性が強いという点から見れば、同じである。

Ⅱ　相手の行為・状態に対する感情評価

相手の行為・状態を認識したことを受けて、そして相手への呼びかけによって、その事柄に対する話し手の感動や、喜びや、驚喜などプラス的な感情評価、あるいは非難、心配、失望、愚痴、嘆きなどマイナス的な感情評価を、呼びかけている相手にぶつける場合の受け手的なタイプの呼びかけ一語文がある。そして、話し手の行為に対する自己評価を、相手への呼びかけによって、その相手に伝達する場合もある。また、その呼ばれた相手が、その感情の与え手であったり、分かち合い手であったり、受け手であったりして、事柄に関与する。

［感動］

(26) 安　奈：寿退社するなら、クビになってもかまわないんじゃない？

宇　崎：えっ？

安　奈：結婚するでしょ？宇崎のくせに、ふん。

宇　崎：くせ…くせにって、そんな、えっ…えっ？

金　山：｛宇崎のそばで止まって、手を宇崎の肩にあてる｝絶対やめないでよ、宇崎さん！

宇　崎：先輩（花）

［驚喜］

（27）賢太郎：そんなじゃな、愛子と結婚できないぞ

三　浦：はい

愛　子：あれ？結婚？　｛びっくりして賢太郎を見る｝　お父さん！　　｛大興奮｝　やだ！

三浦さんのこと応援してくれてるの！　｛大興奮｝（花）

（26）、（27）において、話し手が直接に聞き手から自分にとってプラスになる行動や、今まで望んできたことが現実になっている事柄を受け、感動や、驚喜などの感情を生じ、そしてまたその感情の与え手である聞き手を呼びかけることによって、それを聞き手に伝えるタイプの呼びかけ一語文である。

［非難］

（28）宇　崎：｛あわててコーヒーを安奈の服にこぼす｝　あーっ！

安　奈：｛席を立って、泣きそうな顔で宇崎をにらむ｝　宇崎！

宇　崎：｛怖くて、目をつぶったまま｝　すみません！（花）

［愚痴］

（29）愛　子：三浦さんは、お父さんと話がしたいって。

賢太郎：｛怒る｝　こっちは、話なんかしたくないんだ。金輪際、２度と俺の前に姿を現すな！

｛言い過ぎたことに気づく｝　って、そう言っとけ。

愛　子：｛ショックを受ける｝　お父さん（花）

（28）、（29）において、話し手が直接に聞き手から自分にとってマイナスになる事柄を受け、非難や、愚痴などの感情を生じ、そしてまたその感情の与え手である聞き手を呼びかけることによって、それを聞き手に伝えるタイプの呼びかけ一語文である。そして、この場合の非難は、すでに起こって、その場で補うことのできない事柄にあり、呼びかけている相手の行動を制御する効力を持たないため、働きかけ性は生じない。

3.2.3 第三者の行為・状態に対する認識を起因とする場合

［喜び］

(30) 三　浦：あれ？　挨拶をしに行くって、僕たちの交際を認めてくれたってことじゃない？
花　子：｛振り返って、三浦を見る｝　三浦さん…
三　浦：｛うれしそうに｝　宇崎さん　　｛愛子と抱き合おうとする｝
花　子：｛ちょっと近づいて、急になにか思いつく｝　ダメ！ダメダメ！（花）

［心配］

(31) 賢太郎：｛美奈子の店で、三浦と愛子は分かれたことを美奈子に話した｝
愛子・三浦：｛美奈子が賢太郎に二人が分かれたことを聞いたところ、店に入る｝
美奈子：｛心配している顔で愛子と三浦を見る｝　愛子ちゃん、三浦君
愛　子：三浦さんのお母さんに会ってきた。ちゃんと話し聞いてもらえた。
美奈子：じゃあ、お母さんと仲直りできたの？（花）

［嘆き］

(32) 愛　子：わたしもう二十歳だよ。自由に、好きなことさせてよ。わかってくれた？
賢太郎：それが、結婚してうちを出てくってことか？
愛　子：｛おこる｝　分かってないじゃん。
美奈子：おはよう。
愛　子：おはようございます。　｛美奈子に向かう｝
美奈子：また、親子で漫才してんの？
愛　子：｛泣きそうになり、手を美奈子の肩にあてる｝　美奈子さん（花）

(30)～(32) において、話し手が受けている事柄の与え手は直接呼びかけている相手ではない点で共通している。(30) は話し手と聞き手がともに望んでいる事柄が第三者の行動からわかるとき、お互いを呼び合うことによって喜びの感情をお互いに表現している。(31) は聞き手に不利益のある事柄について、第三者から聞いた後その事柄の当事者である聞き手が現れたため、呼びかけによって、自分の心配しているという感情を相手に向かって表現している。(32) は (29) の「愚痴」と似ており、ともに自分の不満の感情を相手にぶつけている。しかし、(29) が不満の感情の与え手を呼びかけているのに対し、(32) は自分の不満の感情の分かち合い手として相手を呼びかけている。

このように、受け手的な呼びかけ一語文は、相手との遭遇、あるいは相手や第三者の行為や状態を起因とし、遭遇の対象である相手、心理や感情の与え手、感情の分かち合い手、および感情の対象として相手を呼びかけている。

4．おわりに

以上のように、呼びかけ一語文の諸用法を整理する視点として、本稿では、大きく、「働きかけ的」と「受け手的」という区分を認めたが、そもそも、呼びかけ一語文には、呼びかけるということから来る「働きかけ性」と、一語文であることによる「感動詞的な性質」の二面性があり、実際の使用において、そのいずれの面がより強く前面化しているかということによって、諸用法が分化していると見ることができる。つまり、働きかけ性の強弱（あるいは受け手性の強弱）という観点から、諸用法を次のように連続的に位置づけることができると思われる。

	強（受け手性）	（呼びかけ性）弱
受け手的な呼びかけ一語文	↑ 「相手の存在への気づき・相手の現れに対する驚き」	↓
	「相手の発言・行動・状態に対する驚き」	
	「事柄に対する感動・驚喜・非難・愚痴」・「喜び・心配・嘆き」	
	弱（受け手性）・（働きかけ性）	
働きかけ的な一語文	↓ 「叱り」・「制止」	
	「促す」・「注意喚起」	
	「呼び戻し」・「呼び出し」・［意識の喚起］	
	強（働きかけ性）	（呼びかけ性）強

基本的には、働きかけ性の強弱は、呼びかけ性の強弱に比例し、受け手性の強弱に反比例するだろう。働きかけ性が弱くなり、受け手性のみになれば、独り言とも言えるようになるだろう。そしてそれをも呼びかけ語と認めるかという問題がある。聞き手のいない呼びかけ語というものはありえないと考えるのは早計である。「海よ、山よ」のような無生物への呼びかけがありうるからである。無生物への呼びかけには「よ」が必須であるのに、人への呼びかけにそれが必要ないのは、それ自体に呼びかけの機能が内在しているからであろう。人の名前を発するということが、すなわち呼びかけになるということである。さらにここで強調しておかなければならないのは、「非難」、「叱り」の用法についてすでに指摘したように、受け手的な性質と働きかけの機能とは共存しうるということである。尾上のいう承認と希求とは、呼びかけの一語文の中には同時に存在可能なのである。これもまた、呼びかけ的一語文の特殊性である。

残された課題としては、呼びかけ一語文の場合、それを使用する際の表現の種類と形の違いによる、実現された意味の違いの検討があげられる。例えば、「感動詞」が呼びかけの一語文として使用される際、受け手的な用法ではなく、たいてい働きかけの用法を持つことはなぜであろうか。また、呼びかけの一語文には「人称名詞」の形のものがまれであることはなぜであろうか。これらの問題は、今後の課題とする。

注

1 尾上（1998）において、「言語場依存的な一語文」から分類された「現場依存一語文」を「存在一語文」と「内容承認一語文」に分けているのに対して、尾上（2006）においては、「内容承認一語文」という用語自体が使用されていない。これは、尾上（1998）でも言及しているように、「内容承認一語文」は、「ある意味では述体的な」側面をもち、このような文は、尾上（2006）において、「コトの存在承認」とされ、「述体」の側に位置づけられているためと思われる。

2 用例中のブランク（空白）は前の話者の発話が終わらないうちに話者が話し始めたことを示す。

3 ビューラーによる言語の表出（Ausdruck）機能は対他性がないのに対して、本稿における呼びかけ語の使用は常に人間を対象として使用している。この点で、受け手的な呼びかけ一語文が表出機能を実現していると言い切ることはふさわしくないとの反論も考えられる。しかし、もっぱら自分の反応や評価などを表現していることは、表出機能と認めてもふさわしくないことはないと考えられる。ただし、その反応や、評価の由来は相手にあり、そして、表出行動を行っているイマ・ココには呼びかけている相手が存在し、聞き手になっている点は、呼びかけ一語文の特徴とも考えられる。

4 「「表現（Ausdruck）」という機能は、内容が大体表情と同じとみられている。これには単語で一つの文を構成することができ、そして、概念的な内容を持つ単語が、ある結びつき方をして発現される際に、同時に声の表情的効果がついている。（本稿のP5.）」という点からうかがえる。

参考文献

大木一夫（2006）「喚体的な文と文の述べ方」『文化』69（3・4）東北大学文学会

尾上圭介（1975）「呼びかけ的実現――言表の対他的意志の分類」『文法と意味Ⅰ』くろしお出版

尾上圭介（1986）「感嘆文と希求・命令文――喚体・述体概念の有効性」『松村明教授古希記念国語研究論集』明治書院

尾上圭介（1998）「一語文の用法―“イマ・ココ”を離れない文の検討のために」『東京大学国語研究室創設百周年記念　国語研究論集』汲古書院

尾上圭介（2006）「存在承認と希求――主語述語発生の原理」『国語と国文学』83巻10号

佐久間鼎（1995）『日本語の特質』（第七章　文の組み立てp.139－157）くろしお出版

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

高橋太郎他（2005）『日本語の文法』ひつじ書房

守屋唱進（2008）「「呼びかけと語りかけの言語行為」序説」『人文コミュニケーション学科論集』4

山田孝雄（1908）『日本文法論』（第四章p.809－809）宝文館出版

山田孝雄（1936）『日本文法学概論』（第三十章・第三十一章p.663－671）宝文館出版

ジェニー・トマス（1995）『語用論入門』（田中典子他訳）研究社

M.A.Kハリデー／R.ハッサン（1985）『機能文法のすすめ』（筧壽雄訳）大修館書店
Karl　Buhler（1965）『言語理論－言語の叙述機能』（脇坂豊・植木迪子・大浜るい子共訳）クロノス
ローマン・ヤーコブソン（1973）「言語学と詩学」『一般言語学』（川本茂雄など訳）みすず書房
李　紫娟（2010）「日本語の呼びかけ語について」岡山大学大学院社会文化科学研究科修士論文